『秋思』張籍

故郷を思う心を歌う

秋思　張籍

洛陽城裏見秋風
欲作家書意萬重
復恐匆匆説不盡
行人臨發又開封

洛陽城裏秋風を見る
家書を作らんと欲して意万重
復恐る匆匆説きて尽くさざるを
行人発するに臨んで又封を開く

【語句の意味】

秋思　秋の思い　楽府題
洛陽　河南省洛陽市洛水の北側（陽）に位置していたところから
城裏　まちなか
家書　家への手紙
万重　たくさん
匆匆　慌ただしい
行人　使いの人

【詩の意味】

東都洛陽のまちなかで、秋風が吹き渡っているのを見ました。すると俄に故郷のことが思い出され、家へ手紙を書こうと思いましたが、つもる思いがあれこれ湧き起こり、書きたいことばかりです。

あまりに慌ただしく書いてしまったので、言いたいことを書き漏らしたのではないかと気にかかって、使いの人が出発するときに、もう一度封を開いて読み直してみるのでした。

【鑑　賞】

第一句の「秋風を見る」という表現はユニークです。普通秋風は聴覚あるいは触覚でとらえるのですが、ここでは視覚でとらえ、秋風に吹かれて揺れる草や樹木を想起させます。

この「秋風を見る」という表現は『晋書・文苑伝』にある張翰伝の故事を踏まえたものです。「(張)翰　秋風の起つを見るに困りて乃ち呉中の菰菜・蓴羹・鱸魚の鱠を思う」洛陽で「秋風の起つを見る」と張翰は呉(蘇州)の郷土料理が恋しくなり、官職を捨てて故郷に帰ってしまったのです。張翰と作者の張籍が同姓であり、しかも同郷であることがこの詩を面白くしています。

【作者略伝】

張籍(七六六ー八三〇)

中唐の詩人・字は文昌・和州烏江(安徴省和県の人)また蘇州呉(江蘇省蘇州市の人とも)。貞元七五年(七九九)の進士・太常寺大祝・水部員外郎・国子司業を歴任したため、世に「張司業」「張水部」の呼び名がある。詩に巧みで楽府を得意とし、同時代の王建とともに「張王」と称される。韓愈に認められて文学改革運動に参加し、世に「韓張」と並称された。また新楽府運動も積極的に推進した。

【備　考】

「楽　府」

本来、前漢の武帝が設置した音楽をつかさどる官署の名である。「府」は役所・官府。そこでは、廟堂の祭祀や宮廷の娯楽に用いるため、さまざまな歌曲が制作され、また政治の参考にするため、民間の歌謡を収集・整理することが行なわれていた。ところがやがて、この官署で扱われた歌詞そのものを「楽府」「楽府詩」と呼ぶようになる。

楽府は楽器の伴奏によって歌われるもので、曲が先にありそれに合わせて作った歌詞はその曲名を題とする。これを楽府題という。題名に「歌・行・引・曲・吟」などの語がついているものが多い。

作品系列として次の三種を挙げることができる。

(1)さまざまな生活苦を扱うもの＝
貧しい生活に耐えかねた男が、ついに追い剥ぎ強盗をすることを決意し、妻子が引き止めるのを振り切って、剣を片手に飛び出してゆくことを詠ずる「東門行」。両親に死別した少年が長兄夫婦にこき使われ、邪慳に扱われて、いっそ死んでしまいたいと思いつめる「孤児行」。夫と別居している妻が重病にかかり、夫を呼んで三人の子の世話を託し、妻の没後、夫が途方にくれることを詠ずる「婦病行」など。

(2)戦争や労役の苦しみを扱うもの＝
一生の大部分を兵役にささげた老兵の悲哀を詠ずる「十五従軍征」。戦役の将兵を悼む「戦城南」など。

(3)男女の情愛の種々相を扱うもの＝
自分を裏切った男への思いを詠ずる「有所思」、愛を夫に誓う「上邪」など。

【参　考】

「新楽府」

唐代におこる。楽府には諷刺の意味が強くこめられているものが多いが時代が下ると、もと歌が漢代のものだから楽府詩の題名もメロディーも古くなってきた。それまでの楽府詩は官僚詩人が作るものであった。今までになかった内容をうたうこと、もう一つは読んでもらう範囲を広く民衆にまで広めようとする新楽府運動がおこる。それを進めたのが白居易と元稹であり共鳴した詩人が張籍や王建だった。

「涼州詞」（代表的な楽府の一つ）

王翰や王之渙などの作品が有名でほとんどが西域の風物を描きつつ、戦争の悲惨さや兵士たちの望郷の念を詠んでいるが次に記す張籍の詩はシルクロードの隊商を詠う。

辺城暮雨雁飛低　蘆笋初生漸欲斉
無数鈴声遥過磧　応駄白練到安西

辺城の暮雨雁飛ぶこと低く
蘆笋（ろじゅん）初めて生じて漸く斉しからんと欲す
無数の鈴声遥かに磧（せき）を過ぐ
応（まさ）に白練（はくれん）を駄（の）せて安西（あんせい）に到るべし

七言絶句（上平声・斉韻）

辺境の城塞（とりで）に夕暮れの雨が降り、雁が低く飛んで行く。
蘆が芽を出してしだいに伸びそろおうとしている。
数え切れないほどの駱駝の鈴の音が砂漠を通り過ぎて行く。
おそらくは駱駝の背中に白絹を載せて安西まで運ぶのだろう。
（首に鈴をつけた駱駝の隊商が西域を往来するようすは唐代から現在まで変わっていない。ガランガランと音をたてながら果てしない砂漠をゆく隊列が目に浮かぶようである。）

［引用資料］
漢詩歳時記　渡部英喜著　新潮社
漢詩を読む③　宇野直人著　平凡社
漢詩への誘い　石川忠久著　日本放送出版協会
漢詩の事典　松浦友久編　大修館書店